

はじめに

先日、部屋の片づけをしていたら、自分がオーストラリアのパースという町に住んでいた頃に見聞きしたことや感じたことを綴った冊子が出てきました。” West Coast Times” などという偉そうなタイトルが付いていました。その中に、日本人学校に赴任してすぐに書いたこんな文章がありました。

「こちらでは日本人は“外人”ですが、移民の国オーストラリアでは、オーストラリア人と外国人とを区別して呼ぶようなことはないようです。いろいろな国の人が自然に共生している印象を受けます。」

また、赴任後1年半ほど経った頃にはこんなことを書いていました。

「こちらに来た頃の私は、自分が日本人であることに少々こだわりをもっていました。しかし、この国で暮らす内に、自分はアジア人である、というような考えをもつようになりました。アジアの国の友人ができる内に、彼らが自分に似た考え方をすることや食べ物の好みが似ていることから親近感を覚えたのかもしれませんが。それにしても、隣国でありながら話ができなかった彼らと、英語を通して意志の疎通ができるのは、すごいことです。」

そして、赴任して3年が経とうとしていた帰国直前には、こんなことを書いていました。

「日本人学校の子供たちは、日本の子供たち以上に日本のことを知っています。あちこちで日本の文化を紹介する機会があり、そのために日本のことを知る必要があるためです。国際人になるためには、まず自分の国のことを知ることが大切です。日本にいる時も頭では分かっていたのですが、こちらで生活する中で、しっかり実感しました。」「国際共通語としての英語力（特に会話をする力）を身に付けることは、これからの日本の教育で大切にされることになるでしょうが、その根底には、正しい日本語を習得することや、日本語におけるいろいろな表現方法を身に付けておくことが必須です。英語での言い方が思いつかない時、表現方法を変えてみると、意外にさらりと意思表示ができたりするものです。また、これからの国際社会が求める国際人、というのは、どこの国の人かが分からない人間ではなく、まずしっかりと自分の国のことを身に付けている人だと思います。できればいろいろな国のことを知り、自分たちとの違いを知ることや、自分たちも彼らから見て違うことを認識することができればそれがとてもいい経験になると思います。しかし、それ以上に大切なことは、日常の人の関わりの中で自他の違いに気付き、自分の良さや相手の良さを見つめ、尊重する心をもつことです。小学校では、結果を急がず、発達段階に応じていづれは国際社会に貢献できる資質を育てていくことが大切なのではないのでしょうか。」

かなり生意気な事が書いてありましたが、改めて当時のエネルギーを思い出しました。帰国後、私がすぐに始めたのが英語活動です。市教委や校長先生の支援を受け、山口市内

におられたカナダ人と一緒に授業をしました。その頃の山口県では、まだめずらしい取組でした。県外から研修視察に来る方も多くおられました。また、地域と連携した授業実践にも熱中しました。平成9年のことです。

4月から、いよいよ日本の小学校で本格的な外国語教育が始まります。当時の授業づくりの苦労を思うと、とても感慨深いものがあります。あの頃の情熱を思い出しながら、これからの時代を生きる子どもたちに必要な力は何かを見極め、今育てておくべき力を大切に育てていきたいと思います。

さて、山口県国際教育研究会は、山口県から在外教育施設に派遣された教員が中心となって作った会です。海外での生活体験をもつ会員たちは、様々な異文化と出会い、有形無形の様々な異文化を持ち帰っています。そして、それぞれの会員がこれからの教育の在り方についてそれぞれの新たな視点で考え、実践してきています。

この研究紀要は、そんな会員の思いが詰まったものになっていると思います。本会の実践が現場での指導に生きて働くものになることを願っています。

山口県国際教育研究会
会長 辻本 紳一朗
(山口市立二島小学校校長)